女學雜誌

一冊六錢

當府内無郵税

版權所有

各土曜日出版

明治廿二年(第百五十六號)四月六日發

社説
櫻花爛熳

論説
婦人の王國(其五)(平岩愃保述)

批評
加藤弘之氏の女子教育論

叢話
女子高等教育の可否○過去話(高橋おろか)○幸福よ○市川團十郎と衛生新誌○旅のはじ(むらさき)

佳傳
破鏈談第六回(悲矣哉緣を解きぬ)

小説
理想の紳士第十回(月の舍しのぶ)

新報
貸座敷引手茶屋娼妓取締規則○亂暴者横行す○東京婦人矯風會○繪畫上の道德○女權論者と蜂○有志者の寄贈金○華族女學校○御用掛○婦人衛生會總集會○東京府高等女學校○其他十件

外報
世界禁酒大勢○育兒院○米國の天主教徒○米國女子禁酒○英女王陛下

小供話
小鳥のはなし

附録
天下の女子(第二回亞弗利加の婦人)(スピン子ル述)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 156. April 6th, 1889.

EDITORIAL:—Cherries are in Full Bloom.
LEADING ARTICLES:—The Women's Kingdom. By Mr. Y. Hiraiwa.
CRITICAL NOTES:—Woman's Education.
MISCELLANIES:—"Ought Girls to be gives High Education?" "Reminiscences." "Happiness!" "Disgraces of a Journey."
BIOGRAPHIES:—"Breaking the Fetters."
NOVELS:—"The Ideal Beau."
CORRESPONDENCES.
GENERAL NEWS.
CHILDREN'S COLUMN.

RAMABAI'S PROGRESS IN JAPAN.

Prince Komatsu, a close relative of the Mikado entertained Madame Ramabai and Miss Ryder at her palace, December 28, 1888. Dr. and Mrs. Sasaki gave a reception to these two prominent guests one day, Miss Spencer, Mrs. Correlle, Mrs. Yashima, Messrs. Tsuda, Iwamoto and Nakagawa, with several other ladies and gentlemen were present.

Ramabai seemed to be very thankful to Miss Frances E. Willard, of America, and her words often electrified the white-ribboners of America. Ramabai said: "There is a man who has been the president of his country, but we have never seen a man who was president of the whole world. But this year we saw a woman who became the president of the world." She referred to Miss Willard, because she was elected as the president of the World's W. C. T. U.

She asked Mr. Iwamoto: "What is your opinion on the woman's suffrage?" "I am in favor of it because it is right," replied the gentleman. Immediately Miss Ryder and Ramabai, clapping their hands, congratulated Japan for this progressive idea which is now coming in power over Japan, the land of the Rising Sun.

Mr. Sen Tsuda took the guests to Kamakura, a beautiful place, by train (twenty miles) next day and returned the some evening. These good guests will soon leave for Hongkong. We ask that God's blessing may rest upon them in their journey, and they may be rays of the light in India.—*Union Signal.*

BIRTHPLACES OF NOTED WOMEN.

No. —— I.

Frances E. Willard, Churchville, N. Y., Sep. 28, 1839.
Louisa M. Alcott, Germantown, Pa., Nov. 29, 1832.
Mrs. Jane Austin (Goodwin), Boston, Feb, 25, 1831.
Charlotte Fiske Bates, New York City, Nov. 30, 1838.
Rosa Bonheur, Paris (probably), 1822.
Elizabeth Barrett Browning, 1809.
Mrs. Mary E. Blake, Dungarven, Ireland, Sept. 1, 1840.
Helen Gray Cone, New York City, March 8, 1859.
Mrs. Dinah Maria Craik (Muloch), Stoke-upon-Trent, England, 1826.
Alice Cary, Mount Healthy, Ohio, April, 1820.
Phœbe Cary, Mount Healthy, Ohio, 1824.
Lydia Maria Child, Medford, Mass., Feb. 11, 1802.
Rose Terry Cooke, Hartford, Conn., Feb. 17, 1827.
Baroness Burdett-Coutts—Angela Georgiana Burdett—1814.
Mrs. Mary Mapes Dodge, New York City, 1838.
Mrs. Julia C. Dorr, Charleston, S. C., Feb. 13, 1825.
Anna E. Dickinson, Philadelphia, Pa., Oct. 28, 1842.
George Eliot—Mary Ann Evans—Arbury Farm, Warwickshire, Eng., Nov. 22, 1819.
Elaine Goodale, Mt. Washington, Mass., Oct. 6, 1863.
Dora Read Goodale, South Egremont, Mass., Oct. 26, 1866.
Mrs. Felicia Dorethea Hemans, Liverpool, Eng., Sept. 25, 1793.
Emily Henrietta Hickey, Enniscorthy, Ireland, April 12, 1845.
Mrs. Louisa P. Hapkins, Newburyport, Mass., April 29, 1824.
Mrs. Julia Ward Howe, New York City, May 27, 1819.
Mrs. Mary Clemmer Ames Hudson, Utica, N. Y., 1839.
Frances Ridley Havergal, Astley, Worcestershire, Eng., Dec. 14, 1836.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第百五十六號 明治二十二年四月六日發兌

社説

○櫻花爛熳

春曉秋夜花月の觀盛なるときは、吾人常に人世の實相に思ひ到らざるとなし、今や櫻花正さに爛熳、十分の姿態千枝萬朶の頂だきに開らく、吾人之を見て切に感ずる所ろあり。

若し夫れ花を觀て眞に花を知らず、酔歌踏舞して徒づらに狂するもの丶如きは決して吾人が友にあらざる也、彼等は多くの見物と一樽の酒と幾多の美人とあらずんば敢て花を賞しがたし、左れば試みに十里の長堤を吟行せよ、都門に尤も近き所ろ酒店の尤も多き所ろ人の尤も群がる所ろに於て初めて花を賞するもの尤も多きを見る、行人既に絶ゆれば春色獨り沈々たり、此の境涯に入りて喜色滿面初めて仰ぎ喜ぶもの抑そも幾人ありや、故に彼等は酒に酔はんとするのみ、美人を瞥見せんとするのみ、櫻花の開き來る抑そも亦た其の落ち去らんとする果して彼等に何等の感慨あらんや。然れども亦た高く通人を氣取り鶴裳一扇ズットすまして此の間だに歌を詠むものあり、彼等は云く嗚呼さきたりなく／＼と、手をかざして感歎す、轉た、殊勝なるに似たり、然れども其の嘯ふく所ろを聞けば吟聲に云はく、花を見る人も花なり櫻花、嗚呼秀逸く、又云く向島花爛熳と咲にけり蓋し百花の王にてありける、絶妙々々、と如此く自讃自賛してたゞ花を咲たりと云ひ、見るが面白しと云ひ、散るがくやしきと云ふのみ、吾人は不幸にして未だ此の流亞に友たる能はず。

感想は吾人を伴なひて乍ち古しへの詩人に到らしむ、嗚呼古しへの詩人こそ眞とに能く花を觀つる者哉、吾人千古を隔てゝ彼等が歌ひし所ろを聞けば忽焉身の逍遙して彼等に伴侶たるを覺ゆ、千々悠々樂しひ哉。然りと云へども先づ細かに彼等が詩歌を聞けば吾人固より亦た斷腸の念なきを得ず、嗚呼何んぞ彼等が花に泣くとの慘憺たるや、李白は春夜に燭しびを秉て歡樂したる如し、然ども其歡樂や泣きたるが故に樂みたるなり、云く天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世夢の如く、歡びを爲す幾何ぞと、彼先づ如此くに觀ず其花を見ると亦何すれぞ悲しからざるを得ん。放翁云く、

可憐陌上人、亦復笑且歌、世事茫々幾成懷、
萬人看レ花身獨在、北邙秋風吹二野蒿一、古冢漸平新冢高。

吾人亦た彼が後春愁曲を記臆せり、云く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百五十六號　明治二十二年四月六日發兌

社説

○櫻花爛熳

春曉秋夜花月の觀盛なるときは、吾人常に人世の實相に思ひ到らざるとなし、今や櫻花正さに爛熳、十分の姿態千枝萬朶の頂だきに開らく、吾人之を見て切に感ずる所ろあり。

若し夫れ花を觀て眞に花を知らず、醉歌踏舞して徒づらに狂するもの丶如きは決して吾人が友にあらざる也、彼等は多くの見物と一樽の酒と幾多の美人とあらずんば敢て花を賞しがたし、左れば試みに十里の長堤を吟行せよ、都門に尤も近き所ろ酒店の尤も多き所ろ人の尤も群がる所ろに於て初めて花を賞するもの尤も多きを見る、行人既に絶ゆれば春色獨り沈々たり、此の境涯に入りて喜色滿面初めて仰ぎ喜ぶもの抑そも幾人ありや、故に彼等は酒に醉はんとするのみ、美人を瞥見せんとするのみ、櫻花の開き來る抑そも亦た其の落ち去らんとする果して彼等に何等の感慨あらんや。然れども亦た高く通人を氣取り羯裝一扇ズッとすまして此の間だに歌を詠むものあり、彼等は云く嗚呼さきたりなく〳〵と、手をかざして感歎す、轉た丶殊勝なるに似たり、然れども其の嘯ふく所ろを聞けば吟聲に云はく、花を見る人も花なり櫻花、嗚呼秀逸〳〵、又云く向島花爛熳と咲にけり盖し百花の王にてありける、絶妙々々、と如此く自畫自賛してたゞ花を咲たりと云ひ、見るが面白しと云ひ、散るがくやしきと云ふのみ、吾人は不幸にして未だ此の流亞に友たる能はず。

感想は吾人を伴なひて乍まち古しへの詩人に到らしむ、嗚呼古しへの詩人こそ眞とに能く花を觀つる者哉、吾人千古を隔て丶彼等が歌ひし所ろを聞けば忽焉身の逍遙して彼等に伴侶たるを覺ゆ、千々悠々樂しひ哉。然りと云へども先づ細かに彼等が詩歌を聞けば吾人固より亦た斷腸の念なきを得ず、嗚呼何んぞ彼等が花に泣くとの慘憺たるや、李白は春夜に燭しびを秉て歡樂したる如し、然とも其歡樂や泣きたるが故に樂みたるなり、云く天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世夢の如く、歡びを爲す幾何ぞと、彼先づ如此くに觀ず其花を見ると亦何すれぞ悲しからざるを得ん。放翁云く、

可憐陌上人、亦復笑且歌、世事茫々幾成懷、
萬人看ㇾ花身獨在、北邙秋風吹二野蒿一、古冢漸平新冢高。

吾人亦た彼が後春愁曲を記臆せり、云く、

六年成都擅芳華、黄金買斷城中花、醉狂戲作春愁曲、素屏執扇傳千家、當時悅愁如夢寐、眼底何曾有愁事、朱顏忽去白髮生、忽墮愁城出無計、世間萬事元悠々、此身長短歸山丘、閉門堅坐愈生愁、未死且復秉燭遊。

嗚呼悲しみは人間の食料なれ、彼れ一年榮華を極めたり然れども當時その歌ふ所ろ亦た愁曲ならざるを得ず、既にして果して愁城に墮つ此時に於て彼が歌ふ所ろは實に最愁の曲ならざるを得ざる也、左れば花や歳々年々相似たるが如し、吾や年々歳々必らずしも同じきを得ず、遙かに望み見れば白雲漠々、近く臨めば流水跡方なく去る、此に於て行く／＼花下に吟ず抑そも靈能ある人にして果して感なきを得るか、吾人亦嘗て山陽が芳野に遊ぶの詩を唱す、云く、

疊々春山別有天、花開花落鎖依然、可憐万樹香雲暖、曾護南朝五十年。

吾人若し一身を忘るとも豈に歷史に感慨なきを得んや、故に綺羅燦々として朝日に香へるの櫻花は、吾人固より之を惜しみて一日だに放任せず、嵐よ心して吹け、戯れ男よ痛ましく折る勿れと訴ふべし、然れども吾人亦花を知るが故に敢て其落謝するを悲しまず、否な固より之を悲しむ、但だ只だ之を悲しむが故に則はち喜こび見るあり、古人の歌に、

ちる花を何かうらみん世の中に我身も共にあらむ物かは

左れば花や、吾や、共に万代の一過客、彼れ先づ寂滅す、吾豈に亦た寂滅せざるを得ん、之を悲しむとも死は夫に係はらず夫れべし、落花と骨肉と共に北邙山下の土中に入る。

既に夫れ如此く觀じ來れば何人か花を見て先づ感慨せざるを得べきぞ、吾人は李杜韓白の詩を愛吟し亦少しく古今の歌を朗詠したり、然るに其の尤も高尚なるものに至れば皆な人世を果敢なしと歌はざるものなし、彼等すでに之を果敢なしと觀ずる也、故に其の酒に醉ひ月に嘯ふき花下に衰舞する所ろ何れも皆な愁絕の氣を存せざるはなし、一杯の濁酒杯に滿つるとも杯裏に亦た死の影は映り、月色溶々として銀の如く白ろきが亦其の極めて冷やかなる末期を思はせ、絕望して力らなく花下に舞ふ數片の落葩豈に最後の悲しきに連感せしめざらんや。嗚呼死すべきの動物よ汝ぢ何を誇るか、速かに流るるの彗星、輕ろく飛ぶの白雲、ひらめく所ろの電、飜がへる所ろの波の如くに、汝ぢは共生ちより墓場へと過るにあらずや、母が愛しつる緑兒も緑り兒に慕はれし母も母と緑兒とが信任

しける剛膽の父も早晩しか皆な土中に葬らるゝにあらずや、紅顔の少年は佳人を娶らずして死し、深閨の佳人は怨望して逝き、王の手は笏を持ちしまゝに痿え、僧の口は躬からの葬りに説教し、農夫は秋の取實を見ずして先づ刈られ、羊飼ひは羔の長ずるを待たずして失せぬ、聖人も賢者も、孔丘も盗跖も、仁人義士も、ユダもナポーレヲンも、皆な匆々として新らしき墓に入れり。

抑も花を見て其盛りを惜み、盛りを見て其落つるを惜むとき、吾人何すれぞ端なく此大問題に考へ到らざるを得んや。夫れ花を見て如此く觀ず、世人果して吾儕を徒らに憂鬱するものとなすか、或は云はん之れ歎くまじきに歎くもの也、之れ歎いて効なきの事に歎くもの也、更に甚だしきは之を嘲けつて云はん之れ消化機の病める也身躰健康にして精神剛强ならば安くんぞ如此き弱念の感あらんと、嗚呼吾人は此如く評するものゝ其の評するがまゝに一任す、但だ試みに問はん、東西古今の詩人中其の尤も高尚なるものゝ即はち大抵如此くに感慨するは何故ぞ、抜山蓋世の英雄も一旦其の本我に反へる時乍まち如此くに感慨するは何故ぞ、百万の衆を引率し矛を横へて大山水に臨むとき又乍まちにして如此く感慨するは何故ぞ

古人云く人の死せんとするや其言善しと蓋し其の天眞に反へるが故なり、而して其將に死せんとして情慾の暗雲殆んど晴るゝとき微笑一閃して乍ち彼等に生死の大問題を思はしむるは何故ぞ、豈に啻に死する時のみならんや、電雷の轟ろくとき、波濤の覆がへる時、愛情の斷絶したるとき、友人の永滅したるとき、即はち其心尤も私しなく其氣尤も高ぶることなく其念尤も淸みたるの時に於て乍まちにして常に如此き大問題に感慨せしむるは抑そも何故ぞ。昔しルーテルは階下に慟哭したり、而して僧侶は甘笑冷笑して多く酒に醉ひたり、此時に於て泣くもの果して愚、笑ふもの果して賢なりや。

傳すらく朱子經行の處ごとに佳山水ありと聞けば迂途と雖ども必らず往いて遊び、陽明が學を子弟に授くる多くは美山川中に逍遙する間だに於てせり。ラスキン曰く、自然の景を愛する時は人をして眞實ならしむと、實に然り故に吾人も亦嘗て論じて云へり自然を愛觀するとき惡念なしと。蓋し自然の大妙畫は吾人をして恍惚自忘せしむ、則はち塵肉の情緒大率ね去つて本我本性に反へらしむるもの也、此に於てか平生は慾雲にて覆はれたる本純の思念卒然として出現し、我を引きて必らず切要の問題に考着せしむ、故に花月を見て悲しみを

覺ゆるは是れ花月が物を思はするにあらず、吾人花月に對して美性躍發し、美性躍發して吾人を不知不識の間に俗世より脱せしめ、以て吾人をして吾人の眞面目に反へらしめたる也、而して一旦吾人の眞面目に反りて更らに天地と人世とを觀じ來れば、曩には浮々と暮らしたる我が生命は到底死なざる可らずと悟られたり、曩には永世の力らと迄てに頼みたる利達富貴は結局我が生命に効なきものと悟られたり、曩には漠々たる俗塵に包まれて見へざりし實相の今は則はち明らかに見られたり、曩には功名榮譽の蜃氣樓が巍峨として聳へつるが此に至りて一顧すれば殆んど消え失せたり、左らば吾人何をか頼むべき、友人も死せり、父母も死せり、功名利達富貴榮譽も悉とく終末に益あらざりし、左らば吾人何をか頼むべき、嗚呼此に至りては花前月下に慷歎せざらんとするも得ず、詩人歌人が其の悲しき吟聲を發するや眞とに當然なり、此に於て尚ほ泣かざるは冷面寒膓の木石人のみ、苟くも人間か必らずや感泣せん、苟くも眞心あるの人間か必らずや大ひに感泣慟哭せざるを得ず。

故に吾人も亦た幸にして如此く慟哭感泣するとを得るものなり、然れども此に哭泣するが故を以て吾人は敢て絶望するものにあらず、否な絶望せざるのみにあらず、如此くにして天眞に反へり初めて人世の實相を觀破するとを得たり、故に吾人は櫻花を觀て大ひに泣く、而して如此く泣くが故に亦大ひに樂しむ所ろの想念を懷くとを得るなり。

之を天地の經濟に訴たへ、之を万物の進化に問ひ、又た之を吾人本心の聲に聞けば、吾人が靈性は必らずや不朽に、宇宙の大法は必らずや善化するものならざる可らず、若し然らずんば天地人間の本性を解釋し、道德の賞罰應報を解釋し、愛情の無究無極なるを解釋するに於て大ひに不都合あり、左れば吾人は天と地と吾人が本心とに由りて確證し、些さか人世の無常を慰さむるを得べし、此に於てか大道を實認し、正義を確守し、たゞ前あるを知つて后ちあるを忘れ、勇進猛斷、敢て直行して吾人が責任を盡すの善且つ樂しきとを覺ゆる也此故に初めや吾人は俗物の花を賞するを笑ふ、中比ろや厭世家が花に泣くの慷慨に感ず、而して最後に更に一進歩して大ひに慰さめ且つ決する所ろあるを得、此に於てか彼の俗物を嫌ふと甚だ切にして絶望家を憫れむと最も切なり、左れど齊一變して魯に至るとを知らば吾人は先づ世の花を賞するもの、實に花に泣かんとを願わざる可らず。

天地は自然の大美術にして、櫻は自然界に開らきたる極麗の花なり、而して此の花今や正に爛熳たり、觀るもの豈に之に對して天眞の本我に反らざる可けんや。然りと雖ども其の本我に反へるものは啻に浮世の無常なるとを觀ずるを以て止む可らず、更らに一進歩して大に學び得る所ろなかる可らざる也、故に俗よりして禪に入り、禪よりして信仰に入る、吾人もし一と度び信ぜば天地の萬象悉とく變遷す、心裏の望み樂しみ愛情そも〳〵極りなき哉。ブライアント年少にして「サナトプセス」(死賊)を作る、先づ歌つて云く、

汝ぢを生育したる塵土は汝ぢに再び塵土に反れよと要む、汝ぢ即はち人界を去り腐碎して元行に復し、無感の石の友となり農夫に鋤かるゝの冷土に屬す…地上をふむの億兆は地下に眠れる更に多數なるに及ばず、朝たの翼を取つて馬漢の砂漠に漂よひ又流盤の外なき王民の河頭に降りよ、茲にも尚ほ數千万の靈は葬られたり…万年の人一列に行く少年も壯者も妻も乙女も愛らしき赤子も白髪の老人も箇々沓々に足を踏んで過行くなり。

其の辭何ぞ慘絶なる、然れども彼は最後に至つて能く反動し勃然勇さみ吟じて云く、

故に汝等、囚夫が役勞して夜るまた獄に歸るが如くにして死す可らず、寧ろ狐疑せざるの信任に由て支へられ慰さめられ、車に入て幔幕を引き靜かに一睡するが如にして墓に近づけよ。

嗚呼緑〳〵たる新小花の草夫に刈らるゝは固より慘澹なり、然れども之を刈るもの若し天使にてあらば如何ん、色はうつろへり、花は散れり、然れども吾人は能く有望有信の詩人農夫たるとを得るもの也。

論説

○婦人の王國(其四)

平岩愃保述

頭髪も其通り趣味を要します、貴孃方の束髪は實に石に版を押した樣に、皆前髪を剪んで十人集つても百人集つても同じ樣です、夫で似合う人なれば宜しいが、似合はぬ人は眞似ない方が宜しいです、又二十に成つても三十に成つても同じ樣に前髪を剪みグル〳〵と後ろの方で結び附るから、馬の糞の樣だ抔と人に嘲けらるゝにも至る、其樣な束髪なれば私しは日本の島田や丸髷の方が餘程雅致が多いと思ふ、西洋の婦人達も皆決して同樣ではない、種々樣々其人の顔容貌歳恰好や

又態度の如何に依り種々の好みに從つて居る、何にしても、私は衣服や髮に善く心を用ゆるヿが悪るいヿではあるまいと思ふ。

私は勉めて御勸め申したい、天然の美を研き出すヿを、心の美を研き出すと同時に身躰の美をも研き出さねばならん、是には衣服や髮の飾り方に心を用ゆる外に、風儀にも氣を附けるヿが肝要です、西洋には左の如き詞がある即はち「Manner makes gentleman.」風儀は紳士を造ると云ふのですが、風儀は紳士ばかりでなく紳女をも造ると思ひます、善き風儀を養ふと云ヿは、一寸と申せば人の前で大きな口を開て笑つたり、背伸びをしたり欠伸をしたりするヿを愼むのです、又日本の婦人の歩行き附杯も言葉には說きやうがない故、眞似をしてお見せ申しますが、余り見善くは御座いますまい、人間は眞直に立つ樣に拵らいられて有るのだから、歩行くにも何も危ぶない者はない、腰を曲げずともシッカリと歩くが宜しい、又挨拶をするにもほどを善くするのが宜しい、去りながら西洋婦人迚も隨分醜くない事もない、其一二を擧げて申せば、會堂などに參ると遲く來る婦人が何とも言はず眞直ぐに人込の中を前に往く、人は塞がつて席が無いから男の人は立ッて席を讓るとソコニ威張ッて腰を掛ける、婦人は柔しくするのが得意で有りさうな者と思ふに、後から來て前きに來た人の權を讓り受ける、讓る方は如何にも美德であるが是を貰ふ方は不德の事と言はねばならん、又人中に咄をして居る時婦人が出沙張ッて他の咄を取ッて仕舞ッたり、其見苦るしき事夥り私の眼計りかと思ふて或人に内國人には見苦しくないかと尋ねましたら、亞米利加に於ても少しく心有る者は皆是を思いて居ると云事である、是等は日本の婦人が學んではならぬ事です、左ればと云ふて人が是處に御出で下さいと二度も三度も云ふても、後の方に小さくなッて幾度も幾度も袖を捕へて無理々々引張らなければ人の前に出て來ないと云ふ樣な婦人も餘り見善くも無い、又日本婦人が一言葉々々に何度も何度も何を挨拶しても總べて御ジギ計りして居る、御ジギの澤山なのも余り見た處が宜敷くない風にして度を得ない時は紳女とは云はれない、恰度男子が風の度を得ずしてゼントルメンで無いと仝じ事です、故に己れの位地の高きを知ッたなれば其風を善く仕なければならん、又眼つきも大造に大事の事で、婦人の眼つき程尊くもあり卑しくもある者はない、此眼つきの使ひ方に依ては隨分尊くも見ゆる、高尚にも見ゆる、

去りながら若し是をして悪るく眼つきを使つたあればツレとそ言外の咄しである、又手振りあり足振りあり身躰なり歩行き付きありに就て種々注意すべき事もあるが、是を一々申した時は際限もなき事で、皆様が覺へて居る事も出來ますまいし、是も〳〵と云ふ時は一擧手一投足まで注意すべしと云ふ事で、六ヶ敷く申すと大變困つた事になる、併し私は最ふ一層擧めて皆様に申さなければあらん事がある。

則ち第三には是を爲すには精神を善くしあければなりません髮の結ひ方でも、衣物の着方でも、風を好くするにも其本はと云へば精神が土臺である、心の中に眞に神を尊とぶの念あり人を敬い人を愛するの心が内にある時は、總ての働きが美しく見ゆる者です、若し此の内ある精神にして正しくない時は、其外との飾りたる誠に醜き飾りとなり悪むべく賤しむべく吾々をして見るを厭はしむる者となつて仕舞ふ、故に精神則ち其の心が正しくなければならん、彼のショウセフクックが或時云ふた事がある、神の前に於て一番脊の高き人は何人であらうか、則ち愛の充分に滿ちて居る人だと云ひました、其道理に依つて婦人をして勢力のある樣にしやうと思ふあれば、又男子よりして尊まれる樣にならうと思ふあれば又己れの地位を全うし樣と思ふなれば、基督の側に座らあければならん、基督の墓場に近づかなければならん、基督の十字架に長く留まつて居らなければならん、基督の墓場は充分に人を愛し神の心を尊とび人の憐れを恕して爲したる處の者である見よ基督は生前に於ては誠に薄弱の如くで在つた、去りあがら遂には世界の人に對して大勝利を得たる者です、其の如くに基督の側に座はり墓場迄も往かなければならん、外の人は逃げても構はん、己れは長く十字架の下に止まらなければならん、左すれば自然に愛は滿つる樣になり自然に愛を全ふする樣になり基督の恵みも心の中に滿つる樣にある、若し是が充つるなれば總ての者皆な正しく穩當に而も美しく振舞はるゝ者である、婦人が徳を全ふし、其地位を高尚にし、世に眞善の感化を及ぼし始めたるは、基督の墓場に往き長く十字架下に留りたる婦人より始まりたるとを忘れてはありません。

種々のとを申し上げたが、先づ髮と衣物と、次に風と精神と此の三つの外にも尙ほ申し上げたいとは澤山にあるが、是を一々演ぶるも甚だ煩はしう御座いますから、只私は皆樣に一言致しませう、即ち善き習慣を造るとです、其の善き習慣を作るには三の演たいとがある、第一は勤勉の習慣を作ると、

に經濟の習慣です、時を經濟し又金錢を節約すると云ふの習慣を着けなければならん、第三には讀書の習慣です、私は是迄婦人が學校に於て五年なり七年あり勉強したる者は見た、併し家に歸りて若しくは他の家に嫁ぎて一家をなすに當ッて尚ホ書物を手にして樂しむ樣な御婦人には多く逢はぬのです學校に居る間丈けは好し許多の書物を繙きても、夫を持ち家を齊へ其上子供でも出來るならば少しも書物と云へる者は手に取れぬと云ふ樣になる、成程子供の世話も御座りませう、種々其他の御務も御坐りませうけれども、習慣の勢と申すは強い者で、讀書の習慣が失せぬならば子供を世話して居り又乳を吸はせて居りながらも傍らに本を置きて是を讀む事も出來ぬ者ではない、臺所に於ておさんの指揮をしながらも、針箱を傍らに於て仕事をなさる時にも其習慣次第にては隨分に出來る事の樣に思はれる、是は一は樂しみの基となり、一は新しき思想を増す事の出來る者で、夫を助け子供を教育するに於て最も必要なる事と思はるゝ、斯の如く三ッの點をば能く實着に務めて居らッしやるなれば、充分に家の事に向ッて其義務を盡す事が出來るであらう、併し其の習慣を養ひ成すには決して一朝一夕になる者ではない、今後諸先生方の教に依り、五年十年十五年の後に定めて貴孃方の一家を處理なさる時が來るであらうから、其時に於て是等の能き習慣を具へられて居つたならば余程の益があらうと思ふ、其益たる啻に皆さんの益計りではない、一家の喜びは一國の喜び、實に思い遣らるゝである、私は充分に婦人方の勢力の大なる事、又其感化の難有き事を知つて居ります、私が第一に婦人を尊とぶ事を學んだのは母に依りて學びました、母が己れに克つ事の強きや朝は早く起き夜は人に後れて臥などよりして私は母の勢力の感化の大なる事を知ッて居る、時さへあれば畠に出て草を耘る事もあり、子供の教育に從事せらるゝ事もあり、私は、永く其傍らに在ッて親しく其舉動を見て居ッたのが藥になッて、今日では實に大なる寶物を蓄はへる事が出來ました、母を慕ふの切なる子として親を思はぬ者はない、若長じて尚ホ是を思ふとするなれば、其子の終身を動かすは一に母の掌の中にあるので、長じて人となり妻を迎ふるに當て又妻の爲に益を請ける事も尠なくないであらう、實に賢母賢妻の此の世に對して大なる力を有する事は私等の實に驚歎して居る處の者である、故に貴孃方に於ても一ト度びは家を持ちて妻になる事もあらう、又子を持たるゝ事も有らう、既に家あり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

子供有りとすれば、婦人の働くべき區域は全く家に在る、否な私は啻に家ばかりとは申さぬ、併し家なる者は此ぞ働くべき本城である、其本城をば他に侵されぬ樣妻となり母となつて、此の源よりして社會に大なる感化を及ぼし、大いなる勢力を社會に及ぼされん事、是れ偏へに皆樣方に望む處ろであります。(完)

批評

○加藤弘之氏の女子教育論

吾人は加藤弘之氏が大日本婦人教育會に於て演說せられたるもの丶筆記を讀み、着實にして高尙なる女子教育論が追々學者社會に行わる丶を見て慶賀したり。氏は女子高等教育の問題に關して歐米に行わる丶諸ろ〳〵の異說を畧評し、扨て其の信ぜらる丶所を述べて云く、

そこで私は然う云ふ議論は知らないから何れにして宜しからふと云ふとは六箇敷いとでありますが私の考へ丈で思ふといふも現場が男の腦に少しく劣て居る樣だから俄に始めて男の通りに行つて行くと云ふとは矢張り惡るからうと思ひます其れが漸々に行けば宜しいが急に爲さんとするのは惡いに違ひない西洋の如く教育の在る所でも惡いと云ふ議論があるから日本の樣に十五年前か十六年前には更に教育のない婦人に急に歐羅巴の眞似をして教育をし學問させたらどうも躰を惡くするだらうと思ふ日本では亞米利加の樣に大學校に入つて大學者にならふと云ふ人も幾んど無し然う思て居る人もありますまいけれども假令中學校位にしても宜しくないと思ふ何しろ餘り急に學者を拵へ樣とすれば女の心を傷め樣と思ひますそれで矢張り學問をなさると云ふ中にも唯其れを專に爲ようと云ふとでなくまあ普通のとを遣らなければあらん普通のとはソウ六箇敷いとではあい普通の道理の分る樣になるともソウ六箇敷いとはないから其までは遣らなければ昔の通りでは是からは仕方がない先づ婦人の教育は普通にして餘り六箇敷いとは爲ない方が宜しからうと云ふ考へであります。

氏は即はち到底男女の腦力に相違ありとは云はず、必竟現今の有樣に於ては多少の優劣する所ろあるが故に、今ま急激に之に高等教育を授くるは宜しからずと云ふ也。次に氏は今の婦人が西洋の風俗に倣ふと及び宗教を信ずるとの問題に關して左の如く云へり、

何でも西洋通りにすれば困つた人間を日本に拵らへて仕舞うだらうと思ふ西洋の今の風俗と云ふものは昔から段々に變つて來たものである其上に一つ西洋には確い宗教があつて其宗教を信ずる氣性は女が一番強いと云ふ有樣で一の据りを爲て居る其れで何をしても輕薄に陷ることがなくして物が着實に能く落着て出來るが日本の近頃の有樣は誠に浮いたものになつて居る宗教は元よりあるけれども人の心を支配する程の力はない、それですから西洋が宜しいと云へば何もかも西洋が宜しい踊が好いと云へば踊を知らなければ西洋人と交際することが出來ない是からは踊を知るが第一であると云ふ風である踊も宜しいものである交際をするにも宜しい躰の運動にも宜しい宜しいことは澤山ありますが一ツ女の心を支配する宗教と云ふ大切なものがない故に人の心か落付かず只うか〳〵として居ます其れでありますから或は踊をすると云へば只踊が面白く或は其れが盛になつて來ると惡い風俗が起つて來ると云ふことがあらうと思ひます西洋でも隨分踊の爲に惡い風俗が起つて來る宗教と云ふ女の心を支配する強いものがあつても起つて來る只西洋流になると踊は第一大切なものであると云つて家の兩親の機嫌を取ることを止めても踊に行かなければならんと云ふ樣になつて來る日本流の家事の方はしないで宜しいと云ふ樣な弊害が起らうと思ふ。

續ひて又云く、

西洋には耶蘇と云ふ宗教があつて其宗教に心を支配されて居るから心も亂れず品行も宜しいが日本には其れが無くして只眞似をするのみであればうはべのことに止つて居る風俗は西洋の通りにあつても世の中の役に立たないのみならず世の中の害にある婦人が出來ないとも申されん其れで先刻御話しました通り今は西洋のことを總て遣らなければならんときであるからどうも是丈は西洋のことを取り是丈は日本の昔のことを取ると云ふ樣に差別することは六ヶ敷いことでありますけれども日本の女が總て是迄遣つて來た所の平生のこと矢張り爲ると規りを付けて然うして其補ひに西洋のことを以て來ると云ふ考へが女の敎育を起そうと云ふ人の腹にも亦敎育を受け樣と云ふ人の腹にもなければならん。……併し宗敎と云ても今迄の佛敎抔は善くないと思ふどうも澤山宗敎があるが私の考へでは耶蘇敎がよろしい樣に思ふ考へて見れば耶蘇敎が然う云ふ力を以て居る樣に思はれる女はどう

しても宗教に感ずることが男より強い宗教に入つたからは皆善人になると云ふ譯ではないが多數の人は然うなる樣に思ふ輕薄てうわべの樣なことは先づ少なくなる耶穌教は西洋の宗教だから西洋の眞似をする譯だが然う云ふ樣に利益があるなれば其宗教に入ることは極く宜しい併し其れに入つたから皆善くなると云ふ譯には行かんけれども然うすれば自然に落付てうはべのことをせぬ樣になるだらうと思ひます。

現今女の教育を何如程迄の程度となすべきやとは是れ一つの大問題ありと云へども、本來男女の教育を同一に爲しがたきこと、故に亦た男子間に云ふ所ろの高等教育を以て直ちに女子に授けがたきことは無論の事たり。次に宗教及び修身上の此論に關しては凡そ僻見なき哲學者は何人と云へども同意を表するならん。要するに如此き論文の出づるは喜こぶ可きこと也。

附言。「國の基」本日未だ出版せられず玆に之を批評しがたきを憾む（四月一日記）。

叢話

○女子高等教育の可否

明治女學校文學會の討論會に於て右の問題に關して激しき辯難ありぬ、最後に女生等余にも意見を述べよと迫つて止まざれば敢て一言しぬ、若し夫れ細密なる理論に至りては兼て數度たび申したり之にて許されよと斷はりたるが、今亦此はしがきにも斷はり置く。

私しは小さい時は中々の惡戯者であつて兎角高い所ろへ登りたがつた、先づ踏段に登る、垣根に跨がる、木に攀ると云ふやうに追々と立ち上つたが、三つ四つの時は踏段が實に高いやうに思ひ、七つ八つの時は垣根が高いやうに思ひ、十十一の比ろは木が高いやうに思うた、夫より少し大きくなつてからは國の城山が第一に高いと思ふたが、東京に參る途中で初て富士の山を見て之こそ天下第一の高い山だらうと思ふた、然し地理書を讀んでのちにヒマラヤ山あることを知り、天文學を學んでから天の高きことを知り、哲學に入りてより宇宙の宏大無極なることを知りました。

又私しの小さい比は女のマゲが餘程上の方に結はれたので、若し少しでも低くゝ結ふものがあると極めて下品の樣に申しました、然るに東京に參つて見ると五六年前よりマゲの地位が追々と下落し、殆んど落ちかゝり相に頸元に附着く樣になりましたが、不思議なるは之が目に慣れると左程不思議にも思ひませんでした、然るに近來女權の擴張せらるゝ故にやマゲの地位迄でが段々と上進して、近頃はズッと頂だきに戴る所云る頂戴風の束髮が流行つて來たが、扨て之を見ると又た又た中々に宜しい、決して高すぎるとは思はれません。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

左れば物の高い低いと云ふのは殆んど定まりのないことで、昔し高いと思ふたものも後ちには低くなりませう、必竟たゞ其時の場合で云ふものですから、女子に高等敎育を授けては成らんなどと云ふ事は、何を言ふとか殆んど漠然として分らない空論であります。

然し歐米の學者等が大層に八釜しく之を論ずる所ろを見れば、滿皿さように冷淡にも看過されんから一言しませうが、抑そも人間は進歩するものであらう、高等の地に進みたいと思ふものであらう、左らば之に高等の敎育を授くるの可否などと云ふことは天下を愚にしようと思ふものゝ外は決して論ずる迄もないことである、男にしろ女にしろ事情の許す限り高等敎育に移りたいと云ふのは當然の事で、吾々は亦た之を奬勵するはづである。

と云つて男も女も同じ敎育を受よと云ふのではない、女は女學に於て、男は男學に於て、それ〳〵に其の尤も高等なる所ろに進みたいと云ふことを理想にする筈である、コンナことは實に議論のないことである。然し男と女と學問が違はねば成らぬと云ふからとて、今日の大學位ひのものは男も女も共に受ねばならぬもので、言はゞ普通敎育、或はむしろ中等敎育位ひのものです。

女に高等敎育を與へれば躰が弱ると云ふのは實に詰らない議論です、過たる高等敎育を與へたるが爲に躰の弱くなるのは女に限らないことで、男でも左樣です。亦た女子高等敎育を與ふれば子を產むの力が減ると云ふ之も愚論で、過度の勉强が產子の力を減ずるとは矢張り男にも同じきものです。此等の事は何も男女に於て違ふものでない、男にしろ女にしろ其の躰を痛めぬ位いに敎育するのが眞正の敎育であつて、苟くも躰育を考へ合たる敎育とあれば是非此の一事に注意しなければ成らん、故に高等敎育が女の躰を弱くすると云ふのは之は既に高等敎育ではない過高敎育であるのだ、過高敎育で躰を痛めるのは男も同然よ、あの男の近眼になつたり、肺病になつたり、早死にしたりするのは明々白々の事だ。又た女は家を守り子を敎へれば善いと云ふ、成程多くの女は左樣でせう又左樣になすべきでせう、然し家を守り子を敎ゆるに何故へ高等敎育が不入用である乎、尤も高等なる妻と母とは亦尤も高等なる敎育を受ねば出來ぬ筈で、コンナ事は定まり切つた論です。

西洋でも女子高等敎育論に反對する人が多いが、其人々でも

今日普通に歐米の女子を教育する位ひの學問をば高等だとは云はない、然るに日本で今日女子の高等教育と云ふこの高等なるものは、丁度歐米今日の女子の普通教育位ひのものだ、ヤレ高いの低いのと云ふ詰らぬことは止めるが善い、高いも低いも皆な其時々に於て考へて言ふことです。

而して其の時に相應する樣にしろと云ふことは万事當然の理法で、政治にしろ交際にしろ何にしろ同樣です、決して教育に計り云ふことでない、故に女子高等教育の可否などと云ふ議論は丸で止るが善い、たゞコレ〳〵の學科は今日の女子に適するだろうか何かと云ふことを研究すればヨイので、夫は丁度帝國大學の評議會がコレ〳〵の學科は今の大學生に善らうかと言ふて考へるのと同じことです、大學の卵であつた開成學校の比ろの第一級生は當時エライ高等なものであつたらう、然しそれ位ひの學問は今の明治女學校の生徒の二年生でも出來ます、かように高等と云ふ者は段々と流れて行く名稱です。

故に世に女子高等教育の可否と云ふ問題は起るまじき筈で、何如なるか是れ當時に適する高等教育であるかと云ふことが男女教育の双方に於て切に考へねば成らぬ問題です。

Deep thinking and fearless expression. —*Emerson.*

○過去話（一）　　高橋おろか

社會の進歩に隨ひて人の取扱ふべき業の變化るは今更云ふにしも足らざれども能くも變り果たるものかな僅か數年前の婦人のありさまを回顧るにもはや妙齡の令孃といへば學校通ひを止めて琴、三味線に耽り髮は流行の島田に結上て金紗、緋鹿子の手柄に人の眼を動さしめ又細君に至りては鍋町一の大丸髷に臂笠雨を恐れず黒縮緬の羽織は權的風を學び男子の玩弄物となりて卑屈千万の行狀ありしが一度女權擴張の論起りてより婦人社會に高尚ある氣風を抱かしめ少しく卓見ある女子は夙に洋書を翻きて紫式部と才色を競ひ深窓の下に書籍は山を爲して男子の胆を寒からしむ是れ此時に當り女學校の設立東西に起り女生徒の人員非常の增加を現せり然れば今日に及びては女子と雖ども洋書を讀ざれば恥の如く國史を解せざれば輕蔑せらるゝが如し實に是れを前年に比較るときは婦人社會に一大進歩を與へたる者と云ふべし。

今一歩を轉じて九百年前に於る婦人のありさまを見るに如何ある貴婦人と雖も縫績、ゑかき、花結び、染物等は其職たるが如し源氏(野分)に、ものたち抔するねびでたちおまへに(同書花散里)に、わまたしてほそびつめく物に綿引掛てまさくるわか

人ども、あり云々「細流を見るにほそびつは塗桶などの類かといへど古は諸の器物も一々備らず彼是借用ゆること多し」と出たれば當時貴族的の婦人に於るも自身に裁縫綿繰の業を爲したると是れを見て知べし又糸もよる事と見えて同書(浮舟)に、火あかうともして物ぬふ人三人ゐたりわらはのおかしげなる糸をよる、とあり其他枕草子(心ゆく物の條)に、うるはしき糸のねりあはせぐりしたる云々石山寺縁起の書に物ぬう處に糸よる樣を書けり然れば糸に於ても自らよりて用ひたる事と思はるゝなり。

總て此時代に於ては種々なる糸を以て花の形を作り衣服の裝飾と爲したり故に婦人として花結びを爲ざるものなきが如し万葉(四、紀の小鹿が大伴宿禰家持に贈る歌二首の中)に、玉緒乎沫緒二搓而結有者在手後二毛不相在目八方、拾遺集に、春くれば瀧のしら糸いかなれやむすべども猶あはにみゆらん又枕草子に、うす氷あはに結べる紐なればかざす日かけにゆるふばかりを、亦公事根源に、女房の布施どもは色々に結たる花につけて風流などあるを衣筥のふたに入て云々是等の書に因るときは花結びと云ると古くよりありて永く廢れざるが如し源平盛衰記(二)清盛息女の條に、歌よみ連歌し、ゑかき、花結びあくまで御心になさけおはします云々北山院御入内記に、衛府の長一人白綾の狩衣花をつくり又素襖をりものゝ袴花をつく云々或は十二段淨瑠璃縫ものゝ段に、牛若が裝束を擧るところ弓手の菊とぢつぼみし時めての菊とぢさつと開き莟ひらきのその有さまは日本名譽の花むすびが秘曲を盡して結ばれたるとも是れには爭でまさるべき云々亦增鏡(烟の末)に。左兵衛介親朝はむすび狩衣に菊をおきものにして紫裾濃かのさしぬき菊を縫たり云々續山井に、糸さくらこやさほ姫の花むすびと、あり夫れ此引證に因るときは糸を花形に結び衣服の飾と爲して專ら流行せしは疑ふ可からざるなり。

○幸福よ　　ゆきひら

幸福よ、世に汝ほど望み多げにして望少きものはあらじ、余が生るゝや汝を待てり、余の母はいへり、汝生長て人と爲らば、須らく幸福を迎へて娶れよと、余の教師はいへり汝乞ふ一生を幸福に托せよと、友も爾いひ、世人も爾いひ、余が良心も亦爾默けり、斯ても余は倚ほ汝を慕ふべき權利なきか、花は駘蕩たる春に香ふも、月は玲瓏たる秋に照るも、汝と共ならずして何の興かある、左ればこそ、冬の朝夏の夕、或る時は雲峰萬丈の高きに登り、或る時は海底千尋の深きに下り、

行路の嶮を冒しては肉を破り、浮沈の難を凌ぎては血を流し、余は余が一切の力を汝を尋るに盡せりと思ふ、嘗て汝を亞剌比亞馬上、勳章燦たる將軍に問へり、彼はいへり、之をヘレナの風に問へと、嘗て汝を青雲閣上、名擧赫たる宰相に問へり、彼はいへり之を櫻田の雪に問へと、去つて富豪の紳商に問はんとすれば、彼は落葉の聲に半夜の夢を破り、暗淡たる孤燈に數行の涙跟を乾しつゝあるを奈何、貧賤の人に問へば汝は高樓の花に接むといふも、富貴の人に問へば汝は茅屋の月に在りと答るを奈何、再び去つて之を世のいはゆる學者なる者に問はんか、驕慢なる理學者は宇宙問の一切は理學によつて明なりといふといへども、宇宙其者はと問へば彼は默々たり、冷淡なる哲學者は余を目して猿猴の末裔なりと品評し呉れ、又此進化動物は幸福を慕ふ動物なりとまでは解釋し呉れたれども、如何にせば幸福を得べきやと問へば顧みて他を言へり、嗚呼余は斯くも切に汝を慕へども、汝は伺ほ余に半嬌の愛を割かず、余は到底汝に遇ふ事能はざる運命を負つゝある乎、或は又余が汝を索むるの道宜きを得ざるに由る乎、果して然らば乞ふ余に示すに、如何に爲すべきかを以てせよ、汝の好む所を以てせよ、汝は仁愛の紅涙を好む乎、良し余が双臉は幸に之を包めり、汝は信義の熱血を好む乎、良し余が皮膚は幸に之を充せり、汝に遇はん爲としあれば、刀鋸鼎鑊は飴よりも甘し、汝の好む所としあれば余が死は鴻毛の輕きよりも輕し、嗚呼幸福よ、幸福よ。

○市川團十郎と衞生新誌

去る三十日の時事新報は「市川團十郎」と題する社説一篇を掲げて甚はだしく世上の不德男子を責めたり、其冒頭に云く、

今度東京の芝居新富座に忠臣藏を興行して其役割に七段目九段目の由良之助、平右衛門、本藏、となせ、おかるの五役は市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次の三人が代り〳〵に勤ることに定まりしが其相談のとき團十郎はおかるの役に甚だ迷惑するよし申すに付き夫れは六段目のおかるを中村福助が勤めて其跡のおかるなれば、團十郎が五十歳の年齢と若き福助の美麗き面と較べて迷惑なるやと問ひしに團十郎は顔色を改め決して左様なる譯にあらず藝とあれば五十の老人も能く小娘を勤む可し又これまで勤めたるともあれば素より厭ふにあらず却て面白きほどの次第なれども何分にも茶屋場のおかるは人間の中にて最も賤しき女郎なり藝とは申しながら此女郎の役を勤るは恰も拙者の身を汚し其不

外聞不面目は古語に云ふ市朝に鞭うたるゝ心地して堪へ兼るゆゑに異存を申すなりとのことにて傍の人々も之を聞きて大に驚き只管其見識の高きに感心するばかりなりしが左りとて團十郎を外しては芝居も出來ざることゆゑ夫れ是れと賴入り遂に承知して勤ることゝは爲りたれども本人の心には甚だ不滿なりと云ふ。

而して去廿五日に發兌し諸醫學士の盡力に成ると聞ゆる衛生新誌の第一號は、賣笑論とか云へるを草して末文に女學雜誌を評したり、云く、

人間は何處までも人間です。神佛でも木石でもありません。娼妓全廢論者は、ちと人間を善く見過ぎて一買ひ被つて居ります!、

近頃の一雜誌(女學雜誌を指す也)に左の文が見えます。(本誌第百五十號に參看せよ)

梅毒の撿査は固と恐るべきの弊害を其他に流すものあり
婦女ハ之が爲にいよ〳〵墜落して德義の念を失ひ
娼妓に笑はれ玉ふな!、
醫師は之が爲に不知の間言ふ可らざるの不德に陷り、
醫師に笑はれ玉ふな!、
世上の遊冶郎は之を無梅毒の保證と見做して彌よ其の放蕩を極むべし
又た遊冶郎に笑はれ玉ふな!、

如此く冷笑したり、而して此の冷笑するものは團十郎の一輩に如何ん。吾黨の人いよ〳〵奮勉せざる可らず。

○旅のはじ　(第三)

むらさき戯稿

冴え渡る月の光りに、また來ぬ十六夜の姿を憐れと思ひ、咲きもいでぬ花の莟に向て、吹かぬあらしを喞つは、優しき女の心デショー、萬里の孤客、げに古鄕を跡にして父母のいつくしみ深きはごくみの手より愛のまがきより心さへに知り兼ぬる群のうちに置かれし時の思は勇ましのますら雄も、涙の谷に踏み入りましよう、まして優しき姫達は越路に歸る雁をうらやましう思ひ、來しつばくらめに便りを待つの感じはなくてならぬ事デス・・・取越し苦勞は女の持前、女の疾はねたみでおく此頃はホーム、シツキとかはりマシタ、尤も女學校の寄宿舍にある方々丈け。

おみちさんモーソンナ御話しは止めましよう、デスがあなたは幸デスヨ東京に御家があるから、叱て下さる方があるノデスモノ。私などは百八十里も離れて居ますから、

一寸と母が病氣でも歸る事は出來ず、母が心配しても慰める事が出來ず、妹も一昨年歸た時に見た計りで…サア可愛く……ホントーに貴孃がよく妹に似て、アナタを見るといつでも思ひ出しマスヨ、

ツーうれしいと、河田さん…ジャナイ姉さん……デモ御かさんは叱てもまた大へん可愛がつて吳れるは、

ツーデショーッテ。御叱んなすつたつて、イクラ學校よりイーカ、御美知さんこれからよく氣を附けて、勉強をなさらないといけませんよ……

懷中より時計をいだし一寸とながめ

マダ二十分ありますからサー歩きながら御話しをして上ましよう、よう聞て覺て居てちようだいよ、

時子はやがて立上りました何となく元氣付た樣子デス美知子を右手に引て人の立騷ぐ方を遠かり、

これからあなたなどは、多くの人々と御交りなさるノデスから……本當によく氣を付けないとイケマセン、人の心はみな違ひますから、上べで信切そうに見える人が案外に不信切デ、ツーデモない人がかへつて己れの益友デス、また互の交際間に於てコンナ事はと思ふて別に意としない事が大層人々の注意を引て、ソレハ飛でもない事になります、イッカ私しが玉野先生が詩を御作んなすつたのを頂戴して持て居たら二三人の方が妙な事を御しやつて大へんにこまつた事が有ました、ツマリ小な事に氣を付けないと、イケマセンヨ、友人を撰ぶと云事は最も大切でチキニ親しくなつた方はチキニ離れるものデス、勉強する時も氣を附けないとスグに嫉まれかへつて先生方へつまらぬ批評を蒙らせるようになりマス、ホントーにあなた方のような內は別に人が何とも云ひませんが今に云ふに言はれぬ苦しみがたくさん起て來ます、家に居ておつかさんに叱られる時、樂しくホームのうちに養はれて在る時はそんな事は夢にも見ませんが人中へ出となかくドーシテ…世の中は…其上にも女の交際は……

敎えさとす言葉も年たけしに似ず後や先き言の綾もイッモに異て居ます……

御覽なさい、三井さんや、小出さんの樣な方はトウく御朋友のために學校を出ねばならぬようになりました、私はドーカ學校をホームの樣にして互に樂く一致して日く々を暮し度とは思ひマスが、互ひくにミステーキがあ

つて、一つの事が丸くおさまるかと思へばまた一つの事が起て始終波風が絶へない様デスモノ。ツイ思ふまいと思ても國の事などを思ひ出てサッキモ氣がふさいで〳〵たまらなかつたの……一つ學校の中で一つ塾舍デ、ソシテ一つの目的を以て……神樣の爲めに働かふと云ふ……人が互に缺點を伺ひ、其人を批評し……固より惡くデスヨ、ソンナ人が多いうちは女の位置は决して高める事が出來ません一處に運動すると云ふ氣力に乏しいのデスカラ……

此の間美智子は茫然として居ましたが急に何か思ひしように

河田さん、吉川さんが水谷先生は敎授の仕方が大層惡いからあの人の譯の時はイッデモ出ないつて、私はあの先生にマダ敎られた事がないから知りませんが本當に惡いのデスカ、ソシテ不公平ダッテチ！

ソラ左樣云ふ間違が起るから困るト云ふのデス、あの方は東京女學の卒業生デスモノ正則の方は大へんよくなさるノデスが變則の反譯などはなさり付ないから、十分に御敎へなさる事が出來ないノデス、ソレに幹事さんが此頃は大層嚴しいつて皆さんが不平を御しやる相デスが、誰れでも人を叱るほどイヤナものはありませんは、惡く言はれて、惡まれて、ホントーにつまりません……ソレヂ役目とは云ひながら嚴しくなさるのは實に御さつし申すノヨ……御機嫌を取るノハ誰れにでも取れますは。私は吉川さんと云ふ方はよう知りませんが、終にはソンナ事をつしやると御當人の不利益になりましよう……ソウ云ふ方があるから、私共はなほ〳〵謹でソノ樣な方を感化しなければなりません、ソシテ貴孃も今のうちになり丈けよく人を見て誤た方があつたなら、ソノ人を諫め戒め决して其樣な人の感化を受けないようにして下サイ

くさ〴〵のもの語りをなすうち既に早晩鐘を報ずるの鐘ヂャン〳〵

一寸と聞て玉野先生の事を

何に、何デスカ……敎へて頂戴なチ！

人に話さなければ……キットヨ……キットデスヨ

たのみにならぬ契約デス直に結で直に解けさうデスモノ

今日はリーダーの敎授時間に大層怒ッテチ吉川さんを叱たのイッモ嚴しい先生でモーイヤデ〳〵堪らない所へ吉川がまつ先きなつてホラ昨日の譯字チ……先生が調べてやる

つて御しやつた、アレチ先生のが間違て居るソレデは意味が分りませんと言て論じかけたもんだから外の山下さんや小芝さんなんどが一處になつて騷ダノ、ソースルト先生が困て……ソレデモ後では少し氣の毒デシタヨ。ホントーにあんな教師はイヤダワチー……無理に幹理さんの處へ連れテッテサマー……羽田さんや何か御氣に入りの方は御無難サ跡デ御目出度とさんざいつてヤッタワ何の言か契約を結だ上で定めし大事な件と思ひの外案外デスコノ言は……

佳傳

○破鏈談　みどり

第六回　悲矣哉縁を解きぬ。

マリーが苦しき心には一日も千秋の如し、千秋の夜々、限りなきの歎きを寄せて六七年の星霜は極めて重く過ぎ去たり、此の間だジーンが慣れぬ船押の業を取りて慘酷なる刑に服したるは苦痛固より尋常ならざれども、マリーが其の乙女の愛情に悲哀を滿たせ、笑つて交際場裏に周旋し強いて俗々しき母の命に隨がひ、夜深けて獨りジーンの事を口にして昔しを忍びたるの苦痛は、蓋しまた一層の歎きにてありしならん。然るに其母の虛榮は年の老ると共に烈しくなり、且つは愛女が齡ひの漸やく盛りを過んとするに心あわて、何如にもしてジーンとの約束を解かせて之を時めける貴人へ妻はせんと望み、折〳〵には申出してマリーの心を曲げさせんとすれど、其の金鐵の愛情はなか〳〵に溶かし去る可らず。然るに其家も追〳〵に貧窮となり特に老父も長の病氣にて生計も覺束なくなり、マリーが双手を揮つて僅かに助けする糸とりの業も報ひ少なくて左程の効あらざるにぞ、彼が固たき心は十年一日の如しとは云へ斯るあはれに際してはさやうにすげなく謝斷もしがたく、余りしば〳〵の母の申出しに時としては言葉もなく差うつむきしこともありぬ、嗚呼彼の快活なりし此の乙女も今は辛苦にやつれて大ひに世の應接に經驗したり。

母は之を見てマリーがジーンを思ふの念を少しは前よりも減じたりと誤認し、則はち或る時自から牢獄に行きてジーンに面會し之に迫りてマリーとの約束を解かしめたり。ジーンは嘗てマリーと別るゝとき更らに新たに約して終生の命ちを結び合せたれば、此時よりしていよ〳〵深くマリーを信愛し、六七年の獄にありても嘗てマリーが我を疎むとだにも思はざり

しが、今ま其の母の斯く迄に迫りて約を解けよと云ふによりて、つら〳〵と思ふやうは、今に至りてもマリーには決して變改あらじ、左れどわが囚われは到底終身の刑にて迚も再たび人世自由の天を見ると能わじ、左らば彼の可憐なる乙女に一生を苦しましめ、徒らに此の刑人を慕ふて花の樂しみを棄てしむるは之れ愛情に似て反つて眞愛にあらず、如かず今ま我れ斷然之を絕ちて彼に自由の緣を反さんにはと、斯く俠氣の激する所ろとなりて敢て忍びがたきを忍び、遂に彼の神聖なる約束の繩を解きぬ。

母は大ひに之を喜こび、死せしマリーが復活せし如くに祝したるぞ最と苦々しきとあれ。之よりして何處にか善き緣のあれかしと慾眼こして搜がしけるが、玆にアリソン、ピーレーと云へる醫博士の方に心あるやう聞出し、母は直樣之を誘なひ、遂に強いてマリーに承知せしめ、難なく緣事を定めしめぬ、嗚呼悲しき哉。

行到嵯峨日已斜。嵐山一半暮煙遮。醉眸未必沒分曉。啼處松杉明處花。

花ちらす風のやどりはたれか知る
我に敎へよゆきて恨みん。

小説

○理想の紳士　　月の舍しのぶ

第十回　其時襄は演說したり

其後四五年が程は余は襄の事を委細に知らず過ぎたり、蓋は今より思ひ出せば實に幼ならしき極みにて殆んど悲しくもあり又可笑しくもあるとなるが、或る日曜日例の如く襄が余の家に來り兼て父の許しを得たれば最早遠慮なく共に遊びにとて連立ちて出しに、子供心にて端たと歸るとを忘れ、樂しさの餘りにさき〳〵と行て思はず馬車の通ふ邊りに出しが、又た勢ひに乘じて之に打乘り數里先ある某と云ふ鄕に行きたり、然るに之のみならず遂に迷されて或る小さき芝居に入り此時一生一度の芝居見物をしたり、見物の間だに金をすり取られ、不得止夜遲そく步みて歸りたれば家に着したるは曉方近き比なりき、左れば父は大に怒り玉ひて襄が事務に勉強するは確かに知れども、亦た其子を托するの保護者にあらざるとも之れによりて知れりとて、其後は一切吾が家に往來せしめ玉はず、彼はたゞ父の書記として製造所に勤務したるのみなれば、扨ては其后ち余と相見るとの全く絕へたる也。

但だ人傳てに聞きたるは、襄が勉強と事務上の才力とは彌よ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

父に信任せられ、或る時は父に代りて諸方に出で行き、外國との取引を爲す迄に至り、特に父と計りて彼の柔皮製造の外に粉ひきの業をも起し、水車を掛けて盛に粉を製造するよし、然れば父は其後余が面前にて一と度びも裹がことを語り玉はず、裹も亦た昔しの恥を記臆し大ひなる悔悟の功なくてはと思ふて一と度びも余が家に來らず、但だ余が每年の誕生日には無名の賀狀を認め、之を父に托して送り來せしなり。

扨て一千八百年と云ふ年は、古來に著名なる飢饉ありし厄年にて然のみならず諸國に戰亂の絕へざりしかば、米麥の價ひ格外に騰貴したり、余の如き全たく人の保護の下に暮しゝたるものは固より左樣にも之を感ぜざりしが、當時世の有樣は實に悲しき限りなりしと云へり、左れば其頃ろ勢が外より歸る度々の獨り言にも、「何んと云ふ可哀さうな」「此上何如なるとか」などと言ひしによりて見ても、餘程の不幸なりしとは知られし。然るに余は砂漠界の桃原に住みたる如く、たゞ此等の事を餘所に聞けるのみか、思ひ煩らふと云ふは只だ裹と面談しがたきの苦しみのみにありしを思ひ出せば、中々に恐ろしき幸はひなりし。

又た勢が歸りての獨り言によれば、父は小麥を多く藏に貯はへ乍ら未來の大需要を望みて今は之を製造し玉はず、故に其水車は近來日曜日に於ける如く大抵は休み居る事、然るに人民ども間ま之を推知し或る時は大に憤どうりて一揆を起し製造所に押し寄せしと云ふ事、其時裹は一揆の中に割つて入り何事やらん大ひに演說したりと云ふ事、かやうなる事を切々にたゞ打きくのみ、父よりは固より之を聞かず、勢よりも確とは之を聞かず、嗚呼余は幸はひの子なりしか果た不幸の愚人にてありしか。

然るに此時父と裹との一身に落ちかゝりし危難左の如し。

寄書

(本號余白に乏しく此の欄を省く)

新報

(此の欄内自由に轉載を許す)

○貸座敷引手茶屋娼妓取締規則

去月廿七日、警視總監折田平内氏は警察令第十二號を發布したり。一讀するに余程周密鄭重となれり、可賀。

○亂暴者横行す

近來府下に夜中甚はだしき亂暴者の横行するよし、此迄で本郷黴毒病院傍、水道橋邊、今川小路三丁目當り、神田區役所

前等に出沒したるものは、夜更けて通行する婦女子を捉らへ非常なる無禮を働らく由、現に社友の知人の如きは之に出で會ひ辛くも逃れたりと云へり。吾人は一方に於て警察の保護のいよ〳〵嚴密ならんことを希ふと共に、他方に於て切に姉妹諸君を警告す、凡そ如此き時は鋭どきナイフ一刀宛を懷ろにすると至つて宜し、隨分男書生の流にて如此き亂暴を働らくものもある由なれば、女子も之に出で會へば十分に防禦し、寧しろ天下の惡根を絕つべし。

○東京婦人矯風會

本年よりは女學上の運動大ひに相違せねば成らじ、夫等の爲めか婦人矯風會に於ては近來切りに一進步の運動法に付き計畫せらるゝ由なり、尤もの事と思ひて速に其行はれんことを希望す、扨て同會現今の役員姓名左の如し、

會頭　矢島かぢ　　副會頭　荻野ぎん

書記　竹尾こと　　通信書記　元良米

編輯　淺井さく　　會計　本多孝

東部議員（部長）潮田ちせ。元良米。本多孝。佐々木豐壽。伊勢本。工藤さの。石原くに。林うた。

西部議員（部長）淵澤のへ。小崎ちよ。淺井作。小島濱。加藤とし。串田幸。竹尾こと。森とな。

南部議員（部長）湯淺はつ。井深せき。津田はつ。黑川つね。荒井桐月。海老名りん。

北部議員（部長）荻野ぎん。富益みつ。森島いそ。

○繪畫上の道德

英國の哲學士フレデリツキ、ハリソン此頃ろ繪畫博覽會の論一篇を公にしたり、其譯文は去二十六日以後の官報にも載せられてある也、全篇の大主旨切りに畫題撰定の事を痛論し、且つ大ひに繪畫上の道德を辨じたり、其の一節に云く、

想ふに近代繪畫博覽會の彼の如く夫亂雜なるは其の小なるものにして其大なるものは實に巧藝の十九世紀の宗教的、社會的、智識的の運動より分離したる爲、古の畫法を守りて人生の最大勢力を助長するを忘れ漫に自ら師として私智を弄ひ私意を逞くする所にあるなり是世に美術の衰へたる所以、藝術の委靡振はざる最大原因にして教養の素なきと技倆の不熟なるとは寧ろ第二の原因なりとす古の畫師は皆率に衆々の宗教的、社會的及巧藝的の通論を奉じ其技の當時の宗教的、社會的及學術的の運動を代表するを信じ此運動を形容し潤色するを以て其畢世の事業となせり故に其藝術は獨善自足のためにもあらず世教に關係せざる徒技にもあらず實に精神界の最も深遠にして最も勢力ある所を發揮する巧藝的の一手段なりしなり畫師は從僕なりしなり自主自由にして一種の創造力を具備したる從僕なりしや疑ふべからずさ雖も畢竟するに詩人學者僧侶政治家の從僕なりしなり。

○女權論者と蜂

進化論を面白く說くグラントアルレンと云へる理學者あり、此頃ろパウルモウルガゼツト新聞に投書して云く、女權論者が政權を得て社會に働かんとするは其の結果何如に成り行くべきか、未來の事なれば固より之を知らずと云へども、大畧は蜜蜂に徵して知るべし、蜜蜂に中性のもの多し之は女性のものが切りに勞働するに由つて遂に子を產まざるものと爲りし也、思ふに今後もし女が世の中に働らき過れば必らずやかの中性蜂の如き石婦と爲らんと。答ふるものゝ曰く左れどルク

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

レシアモットに五人の子あり、女宣教師ブラックエルに六人の子あり、ケデースタントンに七人の子あり、ワルレース夫人に十三人の子ありしは何如んと。又曰く佛蘭には女學低く女權亦至つて狭まし而して近年其の人口の減ずるとは諸學士の慷歎する所ろなり、英國は歐洲諸國にまさつて女權の隆んある女子運動の活潑なる所ろ而して人口は大ひに增加しつゝ行くと。嗚呼駁するものも答ふるものも一部分を以て全躰とす、とかく世間には奇偏の論が人に好かるゝ也。

○有志者の寄贈金　曩に有志者が設立せし本所區教育議社へ柳原愛子、小倉文子千種繼子、稅所敦子、園祥子の五氏より金若干圓を寄贈されしと云ふ。

○華族女學校　麹町區永田町に新築の同校は日本土木會社にて受負工事中なりしが最早竣工せしを以て去月卅一日同校へ引渡したり而して同校は去る四日より十日迄春季休業さるゝ由。

○御用掛　諸陵頭川田剛氏は華族女學校御用掛兼勤を仰付られたり。

○婦人衛生會總集會　同會にては近日總集會を開かるゝ由なるが同日は三宅秀氏が同會に關する演說を爲さるゝと云ふ。

○東京府高等女學校　築地なる同校の經費豫算は去月廿六日府會に於て否決せしも有志者の寄附金を以て基本とし尚ほ從前の通り繼續し本月一日より授業を始められたり。

○產婆試驗　木挽町商工會に於て去月廿七日より施行せる產婆試驗は本免狀受驗者四十六名假免狀受驗者卅六名にして前三日間は產婆學の試驗後三日間は實地試驗を執行せられたり。

○娼妓認可證書　警視廳より下附したる諸藝人の鑑札は先般何れも區役所より下附替になりたるが特り娼妓のみは去月迄同廳にて下附し來りしも本月一日以後は右鑑札を廢し更に所管警察署より認可證書を下渡することになりたりと云ふ。

○看護婦會　日本赤十字社にては去月廿七日看護會を開かれたり同日の幹事は毛利花房兩夫人なりし由。

○發育院慈善會　東京府發育院慈善會へ宮內女官の人々より金五十圓又た横濱ボイエス商會よりビール八ダース寄附せられたり而して去月十八日より去る二日迄同會々員の申込は廿六名なりと。

○成立學舍女子部　にて去る一日卒業證書授與式を擧行せられたるが卒業せられたる諸子は左の如し

本科生　竹山靜子、石原とめ子、小出悌子、小野竹子、小野銀子、津久井はる子、嘉悅孝子、

撰科生　築山元子、澤田京子、指原乙子、鍋井まき子、大塚美香子、

○日本赤十字社　にては常議會に於て岡山縣に支部を設立し岡山支部と稱し千坂岡山縣知事に其支部長を囑托せらるゝ由。

○近江婦人慈善會　同會犬上支會にては彦根東派本願寺說敎所に於て開會せり會集の會員二百餘名にして江村秀山師外數名の演說ありし由。

○孤兒發育院　京都の菅操四郞、長崎昌の二氏は社會に於て尤も憐むべき棄兒孤兒等を養育するの目的にて東福寺山內寶勝院に孤兒發育院なるものを設置し規則書を發して世の慈善家に贊成を求められたり。

○產婆敎授所設置　石川縣に於て昨年產婆術試驗規則を定め本年より實施するにより其受驗者を養成せんが爲め各郡區に產婆術敎授所を設置し產婆術に必要なる學科を敎授し併せて從來產婆營業者の業務練習規程を定めたりと云ふ。

○長野縣師範學校女子部　は設立以來日尚ほ淺しと雖も生徒の進步著しく第一期定期試驗を執行し去る卅日證書の授與式を擧行せられたり而して當期の入學志願者廿三名にて內十二名は入學を許されたる由。

外報

（此欄內自由に轉載を許す）

○世界禁酒大勢　佛の禁酒新聞は敎授バンジ氏の世界禁酒大勢を載せ佛蘭西の藍十字會の事業日々に進步するを論じ且つ云く、現今英國には全く禁酒するもの五百萬人あり、ノルエーには十萬人あり、スエーデンには六萬人あり、デュマークには三萬人ありと。

○育兒院　米國紐育の育兒會 Childrens Aid Society にて此迄に棄兒を拾ひて之を育て遂に家を與へ職業を授くるに至りしもの八萬五千人あり。

○米國の天主敎徒　ホフマン案內書によれば米國中の天主敎徒は八百十五萬七千六百七十六人ありと云へり、然し此頃紐育サン新聞の調査によれば千二百萬人ありと云ふ此方確かなり。

○米國女子禁酒會　シカゴなる同會の出版局には男女の少年八十人を雇使し內五人は編輯人にて年々禁酒上の文書四百萬乃至六百萬ページを印刷出版すると云ふ。

○英女王陛下　陛下は即位五十年祭の時に受納あらせ玉へる婦人よりの献納金の殘餘なりと稱してセント、カセリンの病院に金七萬ポンド(三十五萬圓位)を寄附せられたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小供談

○小鳥のはなし

りよう子

櫻の花もうつくしく咲いでました春の日に、二羽の小鳥が野遊びをいたして居りマシタ、此二羽の小鳥はかはいそうに兩方とも目つかちで一羽は左の目が潰れ一羽は右の目が見えません、デスカラ外の鳥と遊ぶよりも目つかち伴しで遊ぶのを此上もなく樂しと思て居りマシタ、其とき一羽の小鳥が申しマスニ、昨日御隣のうぐひすさんが向島へ行て見たが櫻の花が大層奇麗にさいたと御つしやつテヾシタが何と御互に參て見ようデハ御ざいませんか私が御案内をいたしますが。と例の御ともだちに尋ねますと大よろこびデスからすぐ向島へと出かけました。やがて案内をいたしました鳥は。もう向島へ來ました何とよい景色デハ御ざいマセンカそら三圍の社デス○マー櫻の花が立派デスコト、一寸と御覧なさい‥‥大そうな人デスヨ。と夢中になつて申しましても一羽の鳥は一向平氣デス。ウソを御吐なさいまし、イー加減な事計り。花が何處にありますものか、きたない舟に色の眞黒な舟頭があくびをするのと、枯た葦の根本に犬の死ダノ位しかありわしませんいゝかげんなとを御つしやる虚言を御吐なさいまし。と腹を立て申しますとまた一羽の案内鳥は。あなたこそイー加減、虚言を吐くも大抵になさい、眞黒な舟頭や犬の死だのが何處にあります、立派な御姫樣のような方や、かはゆい御孃さん方ばかりデスソレニ枯た葦ダトカ汚ない舟ダトカ、あきれかへつてしまつてものがいはれません。と兩方とも眞赤になつて怒りました。その筈です案內者の鳥は櫻のある土手の方ばかり見えて一方の目は潰れて居ますから犬の死んだのや黒い船頭さんは一寸も見えません、ソシテまた一羽は川の方をむいた目は見えますが、肝心の櫻は一寸とも見えません、これが喧嘩の起りでして、雙方ともに自分の目かちは全く忘れてシマウタノデス。ソレから一羽の鳥はあまり腹が立ちまして家の方へ歸ろうとして後の方を向きますと犬の死骸はドコへヤラ咲き亂れたる櫻花が目を驚すばかり、案内者の鳥はふりむいて見ると今迄の御姫樣は消えて色の黒い船頭の顏と犬の死ダノ。ハテ此鳥は何を互に考へマシタロー。味て見て下さい。

コロンバスは織匠の子　クロムエルは酒屋の子
ホーマーは小農夫の子　モハメットは牧人なり
セクスピアは材木商の子　ミルトンは金貸の子

本誌第百五十一號に接すべし

告せられたるに女史が固く執つて尚ほ其說を主張したりしかば、一千八百四十八年遂に火刑に處せられたり、之より後ちは言論社界の靜かなること恰かも墓場の如し。

スリア矢張り女は馬鹿にさるゝ、產婆が取り上げを爲す時若し女子が生るれば產婦に女あることを秘して言はぬやうにするほどなり。

アラビアのベヂウイチン　よては馬を愛すること妻に過たり、子が其母を擊つも父之を咎めず却つて曰く アブヘリン（善く出來ました）と、都府に住むアラビア婦人は非常に粉粧を爲し道を行くに深く覆ひ居りて恰かも衣服の步む樣に見へる。

フヘルラー　埃及なるナイル河畔のフヘルラーの婦人は尤も憐れむべし、其の炎天にも勞働する所ろを見れば全く牛馬に異ならざる働らきを爲すなり。

ワハビーテン　玆に例外とすべきはアラビア人中のワハビーテンにて、奇躰に女の方勢力を有し戰の時などは女が先きに進むなり。

ベルベル　モロッコのベルベルの女は少しく勢力を有し、殆んど一夫一婦の有樣にて覆面を爲さず。

アレキサンドリア及コンスタンチノプル　此他歐人と交通の繁きアレキサンドリア及びコンスタンチノプルの如きは漸やく進步の途に就き宮中にてピアノを彈ずるものあるに至り、英佛獨逸の國語を學ぶもの多く、覆面の如きも薄くなれり、以上述べたる有樣をば彼の開化したる國特に基督敎の行はれて居る國の有樣に比較して見れば實に欠點のみの多きを見るです、例せば家族ホームと云ふものは此邊には決して出來ぬ朝より晚までいつも口論のみ嫉妬のみ遊戱化裝のみをして、母は子供を敎育することもせねば又敎育する方も知らず、斯る間に成長したる子供なれば人と爲りて有爲の人物とあるとも出來ず、只だ馬鹿となり了はる計りです。又離婚と云へるとが盛んよ行はれ、男子は女等が互ひに爭ふを聞て不快に思ひ、遂に女は無用なるものと思ふ迄に至るので、即はち第一に家と云ふホームが成立ず、第二實際に考へても又推測の上よりしても一國が繁榮にあると云ふとなく、人民の半數たる婦人は睡るが如く死せるが如く一人の働らくものなし、敎育は女子の責任なれども之を行わず、斯樣に一家不和、隨て一國不和、一家に人物なく、隨つて一國に人物なく、國家ともに弱くして遂に亡滅に至る計りであります。

左れば マホメット敎を信ずる諸國が皆な一樣に衰頹するは、

其元因素より多くあると云へども、以上述る如く婦人を抑壓すると云ふことが其の尤も主なる元因となることと信じます、此の如き余が認定に對して諸君は亦た容易く信を措かるゝことならんと信ず。

第二回　亞弗利加の婦人

今若し貴婦人方と共に此亞弗利加國へ這入て見ますれば、イロ〳〵な事が目に着く事で御座りませう、この亞弗利加國の北の方のお話しは前會に於て、大概致した處でありますから定めてお分りで御座りませう、御存じの通り此北の方は、サハラと申す沙漠でありまして、此所にはチゲル卽ち黑奴が住んで居ります、又た此下側にはハンプと云ふ人種がありますその下方へ往けば、此處にはホッテントッテンと云ふ人種が住んで居ります、そうして其下にはトッスホープと云ふ人種が居ります、そうして此パンプ人種の國には此下にボルヌーと云ふ人種があります、此チゲルにはヤウラと云ふ人種が住んで居ります、此處にはアッシャンチーと云ふ人種が住んで居ります、そうして又このセチカムビーと云ふ處には佛蘭西の配下に立て居る人種が居ります、そうして上の方には亞弗利加の北方に棲んで回々教を奉ずる人とチゲルとの中間にある人種が居ります、之が卽ち亞弗利加人種の大略であります。

大方貴嬢方は、亞弗利加國の人と聞けば皆な黑奴のやうに思われるのでありませうが、亞弗利加人の中でも此一番下の方に住むホッテントッテンと云ふやうな人種に至りましては、左樣に、眞黑の者ではない、其色と云ふものは黄色掛つて褐色を含んで居ります、勿論其人々はドンナ人物であるか、少しは開けた者であるかと云ふに、決して東洋諸國の人々、卽ち日本人とか支那人とか印度人とか、若くは歐羅巴人種のやうに開けた者で無く極めて下等なる者であります、そうして此處に住んで居る人は皆な茅で圓く拵へた家の内に這入て居ります、そうして其家の内には藁のやうなものがあります、乍併其拵方はナカ〳〵巧なものでありまして、實に吾々の想像するよりは遙か上手に拵へてあります、其家の内と云ふものは善く風が通るやうに致してありまして、冬の寒い時も夏の暑い時も、或は雨が一週間若くは一ヶ月間位降り續く天氣の時でも、決して雨の浸込む事の無いやうに拵へてあります、勿論斯云ふ不開化な處へ往て敎育だのと云ふ話しをしても譯る樣な處では無い、乍併本より小供を育てるやうな人々は住んで居るのであります、そうして此の人々は誠とに氣樂なもの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

でありまして、小供が生れてから段々太つて參りまして、凡そ十歳か十二歳になつた頃一の祝を致します、即ち日本杯でするやうな儀式をして、そうして衣物を着る事を祝ふのでありま す、乍併其處等の女子と云ふものハ奇麗な衣物でも着けて居るかと云ふに然うで無い、然云ふやうな柔軟しい身躰をして居る者は無く、皆な武骨なものであります、そうして其衣物と云ふは獸類の皮で拵へた極粗い衣物であります、此祝ひがありましてから又た二三年立ちますと、今度は成年になつた祝ひをします、即ち一人前の人になつたと云ふ祝ひでありま す、此時にあると何時でも結婚する事が出來る、此結婚と云ふは何云ふものであるかと云ふに、先づ娘の親が其婿さんの處へ往きて其おとつさんと相談するのであります、乍併其相談が當前の相談ならば宜う御座りますが、其處等の人は相談に往くでも何でも無く、唯だいろ／＼な詰らない話しを長々しく喋々て居りまして、序でもあれば娶入の事を言ふのであります、もしお宅の奥さんを貰つては呉れまいかと云ふと、そんなら貰わうと云ふ事になります、そうして之を貰ふには代價を拂て相談するのであります、相談が出來ると直ぐ其日に娘を送るやうな有様でありますから、一寸した間に相談も出來る約定も出來ます、且其日の中に輿入もすると云ふ無雜作な娶入で御座います、之が當前の處なれば本より娶入りをするのは誠とに目出度事で一家の幸福は云ふ迄も無い事でありますが、其處等の人々は結婚するが最後誠とに不仕合せの人になつて仕まうであります、其れは何云ふ譯かと云ふに、其處等の人々は亭主は何時も烟艸を吹て座て居つても、其妻は野へ出て働かねばならぬやうな有様であつて、實は獸類も同じやうな娶入となるのであります、斯云ふやうな人々の云ふ事を面白い話を聞こうと思つても出來ませぬ、其等の人の云ふ事は碌な事では無い又た耳に掛けるやうなものは無いであります、然らば然云ふ人は何を樂みにして居るかと云ふに其等の人は唯だ痲醉をするやうなものを飮んで喜こんで居るのであります、即ちブランデーの如き酷い酒の類を飮んで自分の娯樂として居ります、又た毎日躰屈を來した時に其躰屈を慰めるものは何であるかと云ふに、烟艸を以て第一の娯樂とするのでありまして、或は之を吸ひもするし或は之を嚙みも致します、そうして其烟艸は各々の樂しみにする許りで無く、其處等の人は烟艸を以て非常の力があつて身躰の元氣になるものであると云ふ考を以て居ります、例へば傳兒杯が小

供の惡い時には烟艸を喰わせて之が身躰の元氣になるものと考へて居ります、小供に烟艸を飲ます目的は早く烟艸に熟れさせると云ふ事であります、そうして又た娶入を致しまると云ふ事は誠とに立派な名ではありますけれ共、其實人を買ふやうなものである、殊にカッフルンと云ふ人種の處へ往くと、女子は金で買ふのである、娶入りに娶を貰ふと云ふのでは無く娶を買ふと云ふのであります、そうして其價値は皆な牝牛で拂ふのでありまして、其牛の數に依て人の價値があると云ふ有樣である、即ち一人の女子が或は九匹位に當るものもあります、中には價が高いと十匹にも當る事があります、之は貴孃方には失禮でありますけれ共、亞弗利加の事だから申しますが、亞弗利加では其通り女子をば丁度何頭の牛に當るものであるとか、又は何匹の牛に當る嫁さんとか云ふとを申します、其等の人は皆な顔を塗つて居ります、そうして黄色で鳶色の如き顔をして居る者を大變立派なお化粧と云ひ、又た赤土の如きものを塗て喜ぶ風が其處の邊に行われて居ります、又たバンツーと云ふ處の人種は大變飾りを致します、或は首の下から踵の隅まで鐵の輪を着けて喜んで居ります、其他チゲル即ち黒奴の處へ往きましても、矢張り粉や何かを塗つて居ります、例へば頭の如き油を塗る事丁度日本人が鬢付をする如く致しまして、其上に赤土抔を塗つて、其れで立派なる化粧だと云ふ考をもつて居ります。

此バンツーの海岸に始終住んで居る、カボンと云ふ人種の處へ往きまするど其處が海岸でありますから、外國人と交通が繁い處で、歐羅巴人抔も參ります、夫故に其邊の人は外國人を用る者も見受る處であります、そうして其邊の人は極く提籠を好みまして、小さな提籠の中へイロ〳〵の珊瑚樹の物を入れたり、又は自分の飾りになる物抔を入れて置きます、そうしてカバンの鍵が亦た大變氣に入つて居りまして、其の鍵には餘程立派なる飾り物を掛けたりして珍重して居ります、然云ふ風は海岸のバンツー中の人々のする事であります、殊に又バンツーの中央に在る人種の處で氣の毒なる事は、其人々の壽命の短い事で女子は十歳位になると娶入りするから、二十歳位になると弱つて婆さまとなります、そうして三十位になれば皆な死絶へて仕まふと云ふ有樣であります、是が即ち其邊の人の夭死する一大原因となります、そうして又た可笑いのは娶入りする事に就て、片方の親が片方の人の娘を貰ふと云ふ事であります、乍併最早其家とは縁が無いやうになる

と云ふ事であります。
又た亞弗利加では一般に然うでありますが、殊にバンツー人種の中で最も酷いのはカレモーと云ふ處であります、其處等では女子は始終品物同然である、例へば自分の妻君を隣家の人に貸して、そうして何程かの金錢を取ると云ふやうな事をします、或は又た自分がイロ〳〵な面白い事をした揚句借金でもすると、其代りに何の雜作も無く自分の妻を抵當にする事があります、まるで人間の價値と云ふ考も無く、亦た家族と云ふ考も無い者であります、又其一族にストウと云ふ處の人種は矢張り不相變不開化な處でありまして、其一例を擧げますれば、小兒か產れると未だ親の乳汁も飲さぬ先きに、粟の粥を拵へて喰はせます、そうして其粥の爲めに死ぬる者が大層ありまするけれ共、之は一躰小兒か育たぬのだから仕方が無いとして居ります、そうして此處では小兒が出來た時に女子の兒だと亞剌比亞人や支那人杯のやうに粗末にしない、女子か生れると大事にするが男子が生れると一向大事にしないと云ものは、男子は牛に換る事は出來ないが、女子なら牛と更換する事が出來るからであります、又其子が生れると通例何處でも亭主に屬するものでありますが、其處等では亭主が其子の代りに牛を拂はない間は其子は親の方に附ひて居るものであります、若しも丁度其れに適つた丈の牝牛が無ければ自分の子にする事は出來ぬと云ふ有樣であります。
今度は其上の方のチグルへ參ります、此處は貴孃方御聞及びの通り、亞弗利加人は黑いと云ふは此處の人種の事であります、そうして其黑奴の頭の髮は縮れて居り、唇は厚くして突つたやうになつて居ります、そうして又扁たい鼻をして居ります、其れに又此處は甚だ奇妙な所でありまして、其中貴孃方か聞ひて面白いと思ふのは、ダホメーと云ふのとアシヤンチーと云ふ處の人であります、其處では極く慘酷なる事がある、例へが王か死ぬると人が何百人何千人となく埋められます、それは何云ふ譯かと云へば、人が死んだ後には地獄へ往くか極樂へ往くか分らぬけれ共、何れにしても矢張り復活する所が無ければならぬと云ふので、奴隸を殺すのであります。先づダホメーから始めまするが、一躰王さまの家は何處かと云ふと、決して大きな立派なる宮殿では無い、矢張り茅葺の家の內へ這入つて居るのであります、此の國に往て見て最も奇妙を感ずるのは女子計りが皆な兵卒であります、其の中には大概結婚をしない女子計りが兵隊に這入て居ります、其王さま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の居る所は是より少し大きな所で茅の疊を敷ひた家でありま
す、其處へ往くと王さまの前の右の手には兵隊が鐵砲を前に
置ひて座つて居ます、其後ろには特に勇ある兵として居る者
が列んで居ります、又其左りには王さまの奥方が列んで居り
ます、其奥方は一躰何んであるかと云ふと皆な其れは兵隊の
大將である、即ち兵隊の大將なる人が皆な王の奥樣になるの
であります、斯云ふ國は滅多に無い、大方一つもありますま
い、其國の人は男子をば皆な卑怯者として仕まう、そうして
女子が此國を保護しなければならないと思て居ります、そう
して此兵と云ふ者は平生は分れて居つて、觀兵式をする時抔
には皆出て禮服を着します、其は隊々に依て作つたる禮服を
着て立派にして來ます、斯く大層ある者でありますから中に
は大方人の妻君であらうと思ふけれ共、多くは娘であつて娶
入をした者では無い、唯だ其國を守ると云ふ責めを持て居る
者であります、然云ふやうに勇氣の女子があると云ふたら中
には稱讃する人もあらうが、其代りには極く情の無い荒かま
しき者であります、例へば敵の虜杯は皆な神樣の犧牲にする
を例とする考で、皆な之を殺して仕まう、百人でも千人でも
サッサッと殺して仕舞ます。其れから隣りのアシヤンチの方
へ參りましては、前の通り兵隊は皆な女子許りと云とはあり
ませぬが、何しろ人間が勇氣であると云ふ事は分ります、嘗
て戰爭のあつた時分に懼れて軍さに出なかつた者があれば、
女子が追て來て木刀で以て打擲ります故、中には其れに應じ
て後れ驅けに鐵砲を擔ひて出る者もあり、或は軍を逃て仕ま
つた者もあります、ソンナ者は人が馬鹿にして寄付けぬと云
ふ事もありました、それを看るとお隣甲斐に依て女子が元氣
のあるのに違ない、其處では王さまが澤山の奥方を持て居る、
或人は三千三百三十三人であると云ひ、又或人は三十人だと
申しましたが、實際其數を調べた者もないが、兎に角多いと
云ふ事丈は爭はれない事實であります。

其れから今度は今少し北の方へ往て、セ子ガムビヤと云ふ處
の人々は、佛人の配下に屬して居りますが、其れは皆な酒が
欲くて佛蘭西人の自由になつたものであります、其中でも何
云ふ者が酒を飲むかと云ふと、殊に女子が善く酒を嗜しむと
聞きました、其中の一の例に其處の國王と佛蘭西政府との條
約書中にケ樣な事がありました。

佛國の政府は其處のオツブ王に十本の酒即ち燒酎を與へる、
其れから小使には日本の酒と鐵を一本遣る、又皇女ギレボツ

テーには提籠であります今一ッは四本のブランデーを遣る乍併其れで滿足しない、尚ほ烟艸を欲しいと言つたと云ふ咄であります、此國のお話しを聞けば、黒奴はどんなに落魄れたものであるか、如何なる動物に迄零落するものであるかと云ふ事が分るだらうと思ひます、今ま申す通りセヂガムビヤの女子は、何云ふ運命であるかと云ふに、誠とに可憐そうなものである、亭主は始終烟艸を吸つて坐つて居つても、嫁さんは皆な野へ出て暑い處に居て働かねばなりませぬ、甚しきに至ては幼さ子を抱ひて居つて、少し大きな子は脊に負ふて鎌を以て野へ出ると云ふ有樣であります。如斯極下等の風でありますから、今ま少し宜い處は無いかと云ふと、先達中お話したマロッコに回々教を奉ずるフルラーと云ふ人種があります、之は回々教を奉ずる北部の人民と喜望峯との中間にあつて居ります、其處へ往きまするると、稍々回々教を奉する人く々か例の薄い被衣をすると云ふ風が初つて來る、このフルラーと云ふのはサバラ近傍の人種であります、此フルラーと云ふ人種に限つて學校もありますが決して其外の處には無いです、夫故に他の人種と較へて見ると、餘程進んで居るものと思ふ。

今ま一つ人種のお話しを致しまするが、之も矢張りサハラの近傍でチップーと云ふ人種の處へ往きまするると、女子が皆あ鼻へ穴を明けて眞珠象牙を付け下唇に圓柱形の珊瑚樹のやうな物を下げて居ります、一番可笑しいのはチップーの女子は、餘處へ出る時には皆な木刀を提げて居ります、それは何にするかと云へば、若し敵に遇つて喧嘩でもする時には右の木刀を以て殴りくらをするので中には生が無しになるやうな事があるかも知れぬ、爲めに何時も外方へ出る時には木刀を提げて出ると云ふ事であります。

一躰亞弗利加の女子達は、何が一番氣に入るかと云ふと唯だ目先きの美しいものが氣に入るのです、例へば玻璃の片とか云ふやうなもので、實に詰らないものでも目先きにキラ〳〵すれば其れで氣に入るのであります、又直價のある物でも然うでなければ一向役に立たぬと思ふて居ります、又た其樂みと云ふものも一寸した間に遣られる樂みでなければ仕方が無い、又た働くと云ふ考も決してあるでは無いが、腹が減つて堪らないから動と云狀であります、斯云事は何處にも行われる事でありまして、若又大金を持て居る者がありますれば、決て然云ふ立派な考があつてしたものではありませぬ。

然云ふやうに極憐れなる事は、亞弗利加中に充ちてあるのでありますが、最も憐む可きは奴隷の賣買であります、奴隷も大事に使つて居るのなら宜う御座いますけれ共、奴隷を使ふ爲め之を捺へやうとすれバ、勢ひ之を捕へなければならぬ、其れを捕る事からしてイロ〳〵慘酷なる事が起て參ります、或時には亞剌比亞人の如きは內地まで這入て往て夜るになると默つて村へ火を附けます、そうして其處の人を逐出し逃げて往く奴を捕へ、其をズット一と綴りにして繩の端を把へて海外へ引いて往きます、其間にはイロ〳〵の難澁をしまして或は亞拉比亞にある者もあり、又は他で賣られる者もあります、若し途中で死んだ者があれバ其處へ捨て置きますから、或は獸類の餌となるのであります、其處等の人が人の死んで居るのを見たならバ、此處にも奴隷が獵り取られたと云ふ事が分る位であります、そうして連れて來られた者は駱駝と云ふ名義を以て船へ乘せて往きます、乍併然云ふやうな事は本より人が見て居るべきもので無い、其人を獵取て連て往くと云ふ事は、本より少しく心ある者は默つて居るべきであります併し埃及では奴隷の賣買を堅く禁じてありますから、唯だ默つて船へ人を載せて往く事は出來ぬ、依て稅關へ往て賄賂を遣つて往くのであります、然云ふやうな事は本より諸強國の人々が見ても默つて居つた事でありますが、近頃になつては兵を向けて亞拉比亞人と戰かふやうな事が起つて居りますから、十年と二十年の間には私共斯云ふやうな慘酷なる奴隷賣買と云ふ事も實際見へないやうになるだらうと思ふ、殊に其れに從事する佛蘭西でも、葡萄牙でも、獨逸でも、英吉利でも皆なともに盡力して居りますけれ共、就中私は獨逸と英吉利との事業で此事は成就するものと思ひます。

斯く申して參りますれバ、亞弗利加中での話には採るに足るものは無い、乍併面白ひとは山のやうにありまして、先づ之を一つに約めますれば、多妻と云ふ事は第一の缺點であります、其れから女子が非常に高くされて居る事、即ち前にも申した通り女子は品物である、そうして元金を利用して男子の生活を助け男子の樂みにするやうな事であります、丁度男子と獸類との中間に立つて居る位であります、其上また一家族の生活を爲す有樣が決して無い、例へば人が老身になれバ馬鹿にして仕まふと云ふやうなことであります、甚だしきに至ては大層婦人が辱しめられると云ふ事であります、夫故に殆んど採るべきものは無いやうであります、乍併今ま貴孃方は斯

◎寄宿通學 男女生徒募集

今般從前學科の內幼年科を設け午前は英漢數普通學午後は三時より英學洋學を教授す付ては尋常小學卒業者は男女を問はず寄宿通學を許す但更に內規を設け三ヶ月以上の學資を前納する者は一割を減ず此旨父兄證人に廣告す

神田區小川町壹番地　私立 進德館

六合雜誌

第九十九號　三月十六日發行一冊金八錢　半年前金四十三錢一ヶ年同八十錢

目錄

◎聖書中の難題……ウイリヤム、イムブリー
◎青年論……和田垣謙三
◎六十六書……石本三十郎
◎靈智協會の起原及來歷……小崎弘道
◎印度哲學一斑(譯)
●雜記○スピンチル氏の書翰(獨逸宗教の景況)○基督教の進步○世界宗教の統計○近刊雜誌○廣告

京橋區加賀町十一番地　警醒社

●改姓

原彌一郎事　磯邊彌一郎

同志社寄附金(四月二日迄)

金一圓　但馬國七美郡村岡町　小谷善子
金五十錢　但馬國生野鑛山　栗木𠮷子
小計一圓五十錢
合計二十四圓五十錢

交詢案內

(催促する勿れ 郵券十錢送れ 本社に申來れ)

●雇ひたき方(甲)

十二　下婢　年齡廿歲方五十歲迄の基督信者を雇入度者あり

十五　召使　家內の手助けとなり小兒の世話なすべき年少女子を雇ひたし尤も基督教學問を學びたき志あるものを望む

十六　召使　別に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり

十七　下婢　二十歲前後の給水の労を取る下婢を雇ひたし商家にて家族五人仕事はひまなり月給は一圓以上

十八　下婢　年齡廿四五歲にて裁縫並に數學習字等を閑暇の節は教授致すに付き加給にて雇ひ入れたし但し基督信徒ならば教會へ行くも家內同樣にすべし

一九　召使　年齡十六七才の小間使及び年齡三十才より四十才迄のキリスト信徒にして裁縫の出來る者を中働に雇ひ度處あり

●雇はれたき方(乙)

六　奉公　地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては山手西洋人宅にて耶人協力勉學致し度雇ハれたき二娘より無給にて何地にてもよろし

七　裁縫　年齡廿三才にして家內の手助けとならんがため內職に裁縫に雇ハれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとの事其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三　教師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む

一九　召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督舍監留守居等の者に雇はれたし

二〇　裁縫　年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之內ニ小間使に雇はれたし最も餘暇に稽古授けくだされば給料は不申受

二四　奉公　年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣性の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし

二五　裁縫　裁縫は申すに及ばず婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他官員の御內に教師に雇はれたし

●喜びのめぐみ

十五　召使　乙第廿七號ハ牛込矢來町の某所へ雇はれたり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序
通今居士横山雅男君著

婚姻論

定價三十五錢
郵税十四錢

此の書は通今居士横山雅男君の著にして全編を二十八章に頒ち總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より説き起し早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感ずるの書なり

改正增補

文法口授

全一冊●一名和文獨案内 定價十八錢 郵税四錢

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

此書は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて嚢に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正增補して古人の文章數十篇を卷尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校教科用の書籍に適當也とて既でに高等女學校成立學舍女子部跡見女學校頌榮女學校並に明治女學校長榮女塾等の教科書となりたり

女學叢書

木村鐙子小傳

定價十錢
郵税六錢

巖本善治編

右は鐙子刀自の作傳にて姉妹の必ず閲讀せらるべき價値あるものなり勝安房伯島田三郎外山正一諸氏の序跋あり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

發兌					
四月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
五月。	四日	十一日	十八日	廿五日	
六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	

定價

一册。六錢 郵税。一錢 (但府内無郵税)
十册。五十八錢郵税。十錢 (同前)
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記事を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を出すものは右雜誌二十部の注文を要し以上半頁分毎に十部附の割合と定む

一行 一回 前金拾錢 (廿七字詰)
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる書物の廣告は謝絶す有益なる書物の廣告は社會の爲に無償にて引受く女學に關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町々堂○同西久保[illegible]川町萬春堂○同神田區雉子町開々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區[illegible]町二丁目[illegible]堂○同京橋區[illegible]町[illegible]○同本町六丁目[illegible]○同[illegible]十字堂○同本郷區元富士町[illegible]堂○同太田[illegible]○同本町[illegible]書堂○同京橋區[illegible]○同[illegible]雜誌部○宮城縣仙台[illegible]○大阪[illegible]○同[illegible]○同相州小田原[illegible]○熊本文明堂

明治二十二年四月五日印刷
明治二十二年四月六日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社
編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治
印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"Jogaku Zasshi."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B Hiyoshichō, Shinbashi, Tōkyō, Japan.

遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

WASON
AP2
I104
J74+

女學雜誌

一冊六錢
當府内無郵税

版權所有

各土曜日出版

明治廿二年（第百五拾七號）四月十三日發

社説
何なか中正の旨義と云ふ、女子教育に關する幾多の謬見

論説
鶴龜松竹梅（鈴木弘恭）

批評
紅葉山人の風流「京人形」

叢話
青年歎○歸雁○二百年前の雨○旅のはじ

佳傳
破鏈訳第七回（鏈破れて伉儷合す）（大尾）

小説
理想の紳士第十一回（月の命ーのぶ）

寄書
歌十七首○胸の鏡

新報
國の基○女學生試驗法改正○大禮中の最大禮○十二年後の米國女權世界○ソルダイセル氏婦人の説○養育院慈善會○女子師範學校卒業生○愛知郡婦人會○鹽津女學校○他數件

外報
デムマーク○ウイラード孃の著書○コンス孃市參事會員となる○米國婦人協會○二千五百弗

附録
百人一首講義○女子讀本○婚姻説

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY